編かご屋新聞

鶴川本社
成田
東京
ココ

振替口座
00160-1-11979
加入者名：籠屋新聞社

トカラ塾H.P.
http://user.ecc.u-tokyo.ac.jp/~c08007

発送費節減のため、入手希望の一報がない方には発送を止めさせていただく場合があります。あしからず、社主。

カゴ屋出前教室

あなたの街でも呼んでみよう

二ヶ月も先の話だが、千葉県流山市でカゴ屋がとっておきのお話をする。主催は地元の老舗・ますみ屋である。自然食品を扱う店で、安全食品なら何でも売っている。ナスの黒焼を詰めた歯みがきも売っている。流山電鉄の終点駅小山（流山市平和台三丁目）にある。その店のマツチが殺取りをつけてくれた。この秋にカゴ編み教室を開くのに先立そのお話し会である。

話の内容は、カゴ屋の大先輩であるカゴや煙の養父の自慢話しや、竹笹を振り回す神主の行状にいたるまで、日常の竹にまつわる話しをする。秋のカゴ編みを楽しくするための前座である。

日時：六月十九日（土）午後三時～五時
会場：円東寺（えんとうじ）流山市市野谷（いちのや）563の1
交通：つくばエキスプレス「おおたかの森」駅

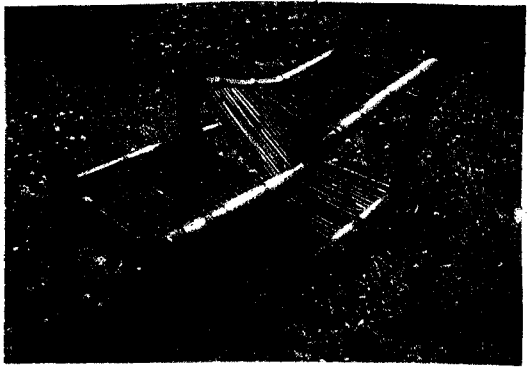
△　△　△

出前予定

七月八日～十一日　東京ビッグサイト
場所：東京国際ブックフェア
六月　長野県大鹿村
十二月三日　宮崎県諸塚村

『竹細工入門　組む編』制作のタダなか（仮題）

三月から四月にかけて、三度にわたる合宿が本社附設の作業場で行なわれた。『一編む編』につづく、竹細工手法書のオニ弾である。机・椅子などが作例として載る。七月初めに発刊の予定。ビッグサイトでのブックフェアでは、社主ジキジキの実演をかねて発売される。ご家族おそろいでおいで下さい。日貿出版社から。



カラ・ケバ一。

時評　「ナオの南風（ハエ）語り」の地鳴りが伝わってくる!!

二年目を迎える「南風（ハエ）語り」が動き始めた。

トカラ塾の活動の一環として、「南風（ハエ）語り」があるのだが、おおもとの塾の内容を簡単に説明しておこう。

ホームページに載せてあるのだが、「南島学」があり、更に、定期刊行物としての『南島学』がある。これらを合わせた三本柱がトカラ塾の活動内容である。

それで、五月二九日(土)の第九回の集いは「南島学」を色濃く出すことにした。

講師に稲垣一雄さん（NTS出版）を招き、沖縄の歴史を語ってもらう。

参考図書『琉球王国』高良倉吉著（岩波新書）、『沖縄の歴史と文化』外間守善著（中公新書）

『南島学エレキ版』2010年3月号より

米論文

○島の知識人（稲垣尚友）

「ナオはビンタが良かで、欺さるんなよ」

…何気なく投げつけられた島人のコトバが、三十年の時を超えて新たな意味をもつ。毎日が土方の島において、「知識人」は常に周縁から発生する（以下略）

○特攻の記憶と痕跡、社会的神話と個人的想起の間で（橋爪太作）

近代戦における特異な行為としての「特攻」をめぐる個人と社会の相克を、「不時着帰還者」「脱走者」といった、通常特攻を語る文脈では等閑視されがちな例外事例の検討から照射する。

（後略）

○イメージのユートピア（日高利泰）

同時代を生きた二人の思想家、Th.W.アドルノとW.ベンヤミンは、かたや「文化産業論」、かたや「芸術の政治化」と、近代複製技術に対して、対照的な評価を下したことで知られる。ヘーゲル以降の精神史をたどりつつ、ともすれば「暗い」の一言で片付けられてしまいがちなアドルノの議論に、絶対精神の夢が悪夢へと転じた時代における倫理的アクチュアリティを見いだす。

（以上、『南島学エレキ版』からの転載）

催事案内

4月24日(土)　南風語り　PM3:00～　梅ケ丘GALA
交流会　PM6:00～　梅ケ丘　備長扇屋　03-5799-3456

5月2日～8日　チベット・タンカ展　お茶の水　世界観ギャラリー
現在のチベット文化の本拠地、インドのダラムサラでの三十有余年の生活を終えた馬場崎研二の帰国展。

5月29日(土)　第9回「南風語り」に代って「南島学」
講師：稲垣一雄（NTS出版）

6月19日(土)　竹講話　流山市市野谷の円東寺
主催：まるみ屋　0471-53-1916
時間：PM3:00～5:00
ツクバエキスプレス「おおたかの森」下車

6月20日(日)　「南風語り」PM3:00～　GALA

7月8日(木)　竹細工見世　東京ビッグサイト、ブックフェア会

3 (注)下級最終行 デカルト『精神指導の規則』から。このごろは定期刊行しているな。

4月24日(土)

「のたうち廻り方」

第8回
「南風語り」

『平島放送速記録』の行間詰
みはお休みとして、生きてきた方法の
序説をとりあげる。(社主)

軌跡:尾瀬沼でのカルピス行商(昭19)
↓
新潟地震のあと始末にマン走
↓
トラックに乗せてもらい、大阪、
↓
北九州へ。途中、宇部と小倉で
路銀を稼ぐ。

奄美大島を訪ねるのが、昭和三十五年夏。
トカラ(十島村)へは二年半後に渡り、
翌昭和四三年八月に臥蛇島に移住。
つぐ、平島へ。そのあといろいろあって、
竹細工修業。タスマニアにアボリジナル
に面会に行く。荷車曳いて、明りから
沖縄へ。そのあと、また、いろいろあって、
トカラ塾の小使いに就く。

「結論は先送りにする」という呪文
を唱えながら歩いていた。怠惰と
背中合わせだから、
そと目には浮遊しているとしか映らない。
これは好都合な外面
を引き出した。「どうせ、
あいつのやることだから」
と無視してくれるのだ
から、こちらはジョーズ
のものである。ときたま、

<荷車を曳いて那覇市内を行く 社主>
1998年3月12日 PHOTO 濱武實

おまわりさんに呼び止められることがある。
「なにね。あんたが、あんまりとりとめもない
歩き方をしていたもんだからね」
卓越した目線に感心したものである。
「結論を先送りにする」構えの背後には、
直観の命令に従って、対象に飛びついていく熱
が、一触即発で出番を待っている。年月を重
ねれば良いものではなくても、経験や記憶の積
み重ねは力になる。いつの日という保証はないが、
ある日、突然に襲ってくる直観は、経験・
記憶の力を借りて、対象をありありと眼前
に顕し出してくれるのであった。
対比が大げさすぎるけど、ニュートンが、「りんご
は落ちてくるけど、なぜ、月が落ちてこな
いのだろう」と疑ったのは、精神の浮遊が
導いた問いであった。遍動の三原則を
引き出すヒイキになった。デカルトはあり
きたりのことしか言ってない。「専門バカは
やめよう」「目の前のやさしいことがらにこそ真
理がある」「直観は真理を導き出す力に
なる。」(注)「語りの当日は「ナマ」「ダブツ」「ミウ」をとり上げる。

「実験物理学を目ざさなかった理由は」

研究室に見慣れない人が入ってきた。同室の先輩がその人と、実験機材の交渉を始めた。実験物理を研さんするためには業者とのとりひきが欠かせないことを知り、理論物理への道を選ぶことにした。

こうした内容の手記を『旅人』の中でみつけてから、社主は湯川秀樹の著作に近づいていった。東京・神田の本屋で著作集を探し出したが、二十冊が一組になっていて、五万円した。いまだ図書館にも収蔵されていないから、既刊本を古本屋でみつけては読んでいる。

新刊の文庫本である

『創造への飛躍』の中で楽しかった箇所は、「開いた世界」の項であった。少し長くなるが引用してみよう。

湯川秀樹

[redacted]

―人間から見れば、自然界や物質世界はそとの世界で、そこには未知な部分がある。だから研究する、探究する。そういう余地がある世界を「開いた世界」という。内なる世界に向かっても開いている。科学の発達で外に気を奪われていたので気づかなかったが、自分自身のことをよく知っているつもりであったが、じつは知らない部分があった。生まれて何年間の自分については知らないし、現在の自分の中に何が潜んでいるかも分からない。自身を制御することもままならない。分からないのは外の方だけかと思っていたものが、自分の中の方にも分からないことがあると気づいた。（中略）

―物質的に中と外との共通のものがあると言ったが、それがどういうふうに働いて、われわれ人間の心の動きとなって現れるか、まだよく分からない。そういう意味で開いている。外に向って開き、内に向って開き、その中と外とがつながっているが、つながりかたがよく分からないという意味でも開いている。三重に開いている。三重に開いて生きているのが人間である―

社主はこれを読んで、同定するものがあった。〈外〉島の外、〈中〉島の中と置き換えた。「開く」は、直観の命ずるままに、対象をありありと眼前に「顕わす」ことであった。このとき、社主は島の中に居るのだが、島民（はえぬきの）ではない。浮遊する周縁の人である。著者は苦笑しているだろう。

△　△　△

そのほか、長岡半太郎の「支那に物理学者の先人を探す」エピソードも社主を悦に入らせた。幕末生まれの人ながら、すでに「和魂洋才」（きびしく）を説いている。